

朗読劇

この子たちの夏

1945・ヒロシマナガサキ

また夏が来ました。女優たちによる地人会のこの「朗読劇」が全国各地を巡演する季節

——二十年めの夏です。

六十一年前の、あの日を綴った子供たちの、そして母親たちの手記、手紙、詩などによって構成された一時間半の舞台です。

声なきものへ

なんぼうにも

むごいよ

みんなにもうわすれられて

埋もれてしまった

ほとけたち

ほとけたち

ほとけたち

なんぼうにも

むごいよ

月のかたぶくばんには

ゆうれいになってやってこい

母さんとはなそうよ

うしろむきになつてはなそうよ

山田数子

もう一度思ってみようではありませんか、あの子たちの短かい生の意味を。

もう一度聞こうではありませんか、あの子たちの悲しみの声を。

それは、きっと私たちの生命がほんとうに輝く日を教えてくれるでしょう。

出演者 (五十音順)

●大原ますみ



●神保共子



●日色ともゑ



●松下砂稚子



●柳川慶子



●山田昌



〈寄せられた感想文より〉

●せんそうのせいで、つみのない人やかんけいのない人たちが死んでしまうから、せんそうはいけないと思う。せんそうは、けしてかつこいものじゃない。(八才・男子)

●体験したことなどもちろんないからよく言えないけど、これを聞いて思ったことはこわいではなく、うまく言えないがみように戦争をおこした人達がむかついた。(十三才・男子)

●今回の劇を通して「思いやり」という事を強く感じました。被爆し、傷つき、自分の事で精一杯のはずなのに、出てくる言葉の何と優しいことでしょうか。平和な時代を過ごしている私たちでさえ、こんな優しい言葉を返すことはできないのに。(十八才・女子)

●母を、弟を、父を、姉を。自分だけで生きていくんじゃないんです。この僕を育てたのは？はずかしい、忘れていました。いや、おさなりにしていました。(二十二才・男子)

●私と同じ位の女の人が、白血病で苦しみながら希望が見えない日々を過ごしていたことにやり切れない気持ちになりました。同時に母親の素晴らしさ、偉大さも教えていただきました。(二十五才・女子)

●戦争をおこして殺し合うのも人間なら平和を願ひ訴えるのも人間。犠牲になるのも人間なら戦争の痛手を忘れるのも人間。人間っていったい何なのだろう？(十六才・女子)

●息子を連れて来ました。六才の息子が泣いています。「また戦争があるの」したずねています。戦争がなくなるようにここに連れてきたのだと答えると、深くうなずいています。みじろぎもせずに見ていました。(三十才・女子)

●母や子の悲しい思い出の文章がもう二度と書かれることがないように、そして今世界中で悲しみのただ中にある母子たちに早く平穏な日々が訪れますように。(四十三才・女子)

●帰宅して汗をかきながらカレーライスを作りました。窓の外では短い夏をさかんに蟬がなっています。こんなささやかな夏の日が本当に幸せなんだなと思いました。(五十才・女子)

●同じ世代に生きたものとして、この四十年間は何かだったか、改めて問い直された思いだった。(五十五才・男子)